

山崎懐古（榛葉竹庭）

軍を 進む 襟帯の 地

龍虎 乾坤を 賭す

義を 破つて 何ぞ 祐を 蒙らん

天に 順じて 能く 恩を 報ず

三川 謾に 響き 有り

四處 更に 痕 無し

戦亡の 士を 弔わんと 欲すれば

林を 穿つて 蜀魂 啼く

進軍襟帯地 龍虎賭乾坤  
破義何蒙祐 順天能報恩  
三川謾有響 四處更無痕  
欲弔戦亡士 穿林啼蜀魂

解説 天正十年六月二日、信長を本能寺に急襲して天下を掌中に収めだかに見えた明智光秀に対し、六月三日夜変を知った秀吉は、直ちに毛利と講和を結び、同月十三日、三万五千の兵を擁して京に向った。一方、光秀は一万五千を以て山崎にこれを迎え撃ち、天王山を制圧すべく攻撃を開始したが、僅か二時間にして崩れ去り、敗走の途次、彼は小栗栖に於て土民の槍にかかり、空しい最期を遂げた。

語釈 ※襟帯地 山川がめぐり囲んだ要害の地。 ※乾坤 天地。 ※祐 天の助け。  
※順天 天命に従う。 ※三川 桂川・宇治川・木津川。 ※蜀魂 ほととぎす。

通釈 両雄が天下を賭け、要害の地・山崎に軍を進めた。義を破った光秀が、どうして天の助けを承け得よう、一方、天命に従った秀吉は、よく主君の恩に報い得たのであった。三川はむやみに響くが、四辺に当時の痕跡は無い。当年の戦残者を弔わんとすれば、林を穿つてほととぎすがけたたましく啼いた。